

安心と挑戦の循環を 園から学校へ

—— 幼保小の接続・架け橋を通して
わくわくする園と学校を実現する ——



東京書籍



フレーベル館

第1部

第2部

無藤 先生 導入
大野 先生 事例紹介
片岡 先生 事例紹介
武山 先生 事例紹介
無藤 先生 まとめ

休憩

座談会
まとめ



無藤 隆 先生

(白梅学園大学名誉教授)



大野じゅん 先生

(風の丘めぐみ保育園園長)



片岡麻梨子 先生

(横浜市立旭小学校教諭)



武山朋子 先生

(鎌倉女子大学短期大学部准教授)

2025年8月19日(火)、フレーベル館本社(オンライン同時開催)において、本セミナーが行われました。幼小それぞれの実践者の事例紹介から、参加者の質問に答えていただく座談会まで、保育者・学校関係者とともに架け橋プログラムへの疑問・お悩みの解決へのヒントが得られる充実のセミナーとなりました。

ここでは、本セミナーのテーマである「安心と挑戦の循環を園から学校へつなぐためには？」のうち、園での実践の一部を2回に分けてご紹介します。ぜひご覧ください。

園

から

の

事例紹介

子どもとつくる “安心と挑戦の場”



大野じゅん 先生

風の丘めぐみ保育園では、子どもたちが「いたずら、けんか、ふざけ、あまえ、わがまま」といったありのままの姿を見せられる安心感を何よりも大切にしています。しかしまだ開園して4年目の園であり、小学校への接続についての経験値は低く、まだまだこれからです。小学校への接続について悩んだり迷ったりしていきながら、それでも子どもたちが毎日わくわくして過ごせる場をつくっている様子を紹介したいと思います。

地域

との

つながり

畑のおじさんとの交流

本園では、地域との関わりやそのきっかけとなるような取り組みを積極的に行っています。しかし、最初から理想的な関係がすぐに広がるわけではないのが現実です。

1

畑のおじさんと子どもたちの出会い

園が開園した当時は、園ができたことで畑の日当たりが悪くなったこともあり、畑のおじさんはあまりウェルカムな雰囲気ではありませんでした。そんな大人の事情を気にしない子どもたちが、毎日毎日2階の窓から「おじさん」と呼びかけ続けました。ある日、おじさんに「よく聞こえないから降りて来いよー」と言われ、みんなで畑に行きました。これが園と畑との関わりの始まりです。

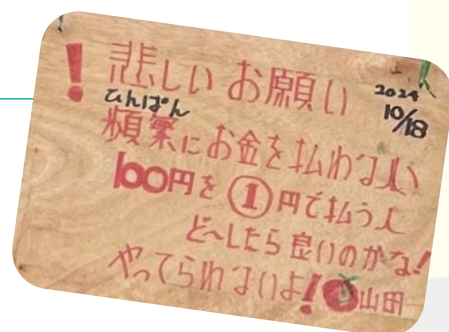
その後、職員も人となりを知ってもらおう努力を重ねました。今では子どもたちが畑のお手伝いをしたり、園のテラスで栽培している野菜の様子をおじさんに見に来てもらったりしています。街を歩いていても子どもから大きな声で名前を呼ばれることが増え、おじさんは「恥ずかしいんだけどうれしいもんだなあ」と話してくれるようになりました。



2

地域の問題解決への挑戦

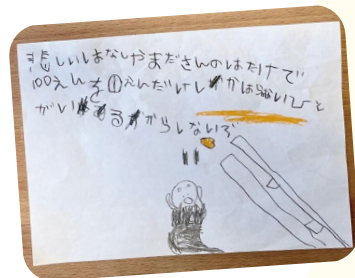
ある日の登園時、畑の直売所にいつもと違う貼り紙がしてあることに、数名の子どもが気付きました。その貼り紙のタイトルは「悲しいお願い」で、無人の直売所で野菜を盗んだり、100円なのにわざと1円玉を置いていく人がいるという内容でした。子どもたちがおじさんに直接話を聞きに行くと、おじさんが「どうしたらいいんだろうなあ。大人がそんなことす





るから悲しくなっちゃうよ」と話し、子どもたちはいつになく集中して聞いていました。子どもたちは園に戻るとすぐに「悲しいはなし 100えんを1えんだけしかはらわないひとがいるからしないで」というポスターを作りました。貼り紙の横に貼ってもらったところ、道を通る人たちが一生懸命読んでくれ、子どもたちはその様子を2階から見てとても喜んでいました。

これは悲しい話ではありましたが、こうした地域の関わりを味わい楽しむこと自体が重要であり、この経験が「彼らが自分が住む街に興味をもつきっかけを園としてつくってあげること」につながると考えています。



風の丘めぐみ保育園では、朝と夕方にサークルタイムを設けています。その位置づけについては試行錯誤中ではありますが、子どもが経験したことや思ったことを「言葉を使ってつなげる場」を目指しています。これは、単に日にちや天気を確認したり、夕方の反省会をしたりするのではなく、子どもの主体的な表現を促すためのものです。特に3歳児クラスの最初のうちは、集まって同じ時間を過ごすことすら難しいため、保育者が話をしたり、子どもの言いたいことを代弁したりすることから始めています。

こうした経験を積む中で、子どもたちはサークルタイムでは「自分のことを話していいんだ」と理解し始め、話したいことや見せたい工作物などを事前に保育者に伝えてくるようになります。時間はかかるものの、やがてクラスの前で話せるようになり、だんだんと友達の話にも耳を傾けるようになっていきます。

この経験を積み重ねることで、大勢で大人の話も集中して聞けるようになり、小学校の授業に似た形でも集中して話を聞けるベースができてきます。最終的には、子どもたちだけで話し合いのようなことをする頼もしい姿も見られ、園の保育における重要な育ちの姿として小学校への接続を支えていると考えています。



幼小
接続

事例紹介

園と小学校をつなぐ 視点について



武山朋子 先生

大野先生の発表でもあったように、園では本当に素敵な活動が行われており、小学校に入学しても子どもたちの育ちと学びはつながっていると感じられたのではないのでしょうか。このように子どもたちがわくわくするような架け橋期のカリキュラムをどうやって作っていくのかを改めて見ていくと、「共通の視点をもつ」「協働してつくる」といった言葉が出てきます。しかしながら、なかなかできていないのが現状であり、せっかく幼稚園や保育園等で素敵な教育を受けてきた子どもたちが、学びを小学校で生かしていかない、そんな現実があるのではないかと感じています。

この現状を変えるためには、架け橋期のカリキュラムづくりに園と学校が一緒になって取り組むことが重要です。出来上がったカリキュラムそのものよりも、一緒に考えているプロセスにこそ意味があります。「架け橋期のカリキュラムを作りましょう」というのは、お互いのことをまず知り合いましょうというメッセージとして受け止めることが大切です。最も簡単な知り合い方として、「百聞は一見にしかず」で互いの場を見に行ってみませんか。

1 小学校の先生が 園を見に行く

小学校の先生は、園の子どもたちが図鑑の索引まで調べたり、醤油作りをしたりといった探究的な活動に夢中になっている姿を見て驚くでしょう。私がお伺いした園でも感心したことがあります。子どもたちがたくさん収穫した柿の実を、いくつかあるのだろうと数えだしたのです。非常にたくさんの柿の実だったので、子どもたちが自発的に「10個ずつにしよう」と並べ始めたのですが、その姿は、小学校の算数で学ぶ「位取り」の学習につながっているなと感じました。

2 園の先生が 学校を見に行く

園の先生が学校に行くと、子どもたちは「先生！」と喜んで飛びついてきたり、小学生やってるんですという姿を見てもらいたくて張り切ったりします。また、園で学んだことを生かしている姿を見ることが出来ます。例えば先生に言われなくても、色水遊びで廊下が濡れたときに雑巾を持ってきてきれいに拭く姿など、園での経験を生かしている子どもたちの様子が見られました。



知ろう！

3 対話をする

園と小学校の先生が直接会って対話することも大事だと思います。事務的な打ち合わせではなく、子どもの姿で語り合うのです。園は時間が自由、学校は教科書を使うといったお互いの違いではなく、お互いに共通することを話し合いながら、園も小学校も「子ども観は共通」であることや、「安心がすべての根本だ」という点が共有できると思います。また、園の先生に「園ではどうでしたか？」と子どもたちについて聞いてみるなど、小学校側から働きかけることで、園の先生方も園で取

り組んできたことが生かされるという自信がもて、入学までに何かできるようにしなきゃという不安から離れられるのではないかと思います。やはり小学校の先生に頑張ってもらいたいです。園からもぜひそういった働きかけをして欲しいです。

こうして園も学校も手応えを感じたら、ぜひ保護者や地域の方にも発信していきましょう。夢中になって遊ぶ子どもたちの姿が豊かな成長につながることを伝えると、保護者も安心するのではないのでしょうか。それが園や学校、保護者や地域の方々と一緒にわくわくする園や学校をつくっていくことにつながっていくのだと思います。まずは一歩、知り合うところから始めていきましょう。

一部ではありましたが、本セミナーの雰囲気を感じていただけたでしょうか。

セミナー報告 (Vol.2) は翌月 (2025年12月) 発信予定です。

本セミナー全体をご覧になりたい皆様、オンデマンド配信 (有料) がございますので、よろしければご覧ください。
フレーベル館では、保育・教育の質向上を目指し、探究活動や環境設定の実践的なヒントから幼保小接続、性教育、安全対策、保護者支援、コーチング、発達支援など、幅広いテーマの研修を専門の講師陣とともに発信しています。
園に学びたい小学校の先生も必見です！ ご興味がおありの皆様、ぜひ下記よりアクセスしてみてください。

保育セミナー

<https://seminar.froebel-kan.co.jp/>

お申し込みは
コチラ→



保育・幼児教育を支えてきたフレーベル館と小学校から高等学校までの
学校教育を支えてきた東京書籍とのコラボレーションにより、
新たな相乗効果を生み出します。今後も引き続きコラボレーションにご期待ください。